

近代佛國繪畫に現はれる海

黒田重太郎

夏が来た。眩いばかりに陽をうけて霞の上

に重疊する雲の奔、窓外の緑樹を訪れ、幾か

に吹子過ぐる風の姿、孰れか私達の胸に新し

い <sup>メリジン</sup> *Horizon* の渺茫たる振を描き、思ひを濶大に

海、紺青の廣がり、<sup>メリジン</sup> 誘はぬ水の音があらうぞ!

自然は常に其微笑を以て懨懨した人の心を麻

を開かぬ、更に遠い郷土の傳を慕はせる。そ

の如く十九世紀の佛國畫壇に一度自然に覺め

て以来自然の傳を打ちて神秘の境を探らうと

した。其間に在る日海の想念の究底が、奇

しくも思潮の推移を反映してある事は私達の

注目に値しなげらばならない。

日海を慕ふは同郷病のありはるに在り、西の

國の人は云つてゐる。敢て同郷病のみに限

らなぬ。諸に立つて遠く北天紡織の際産を望

む時、見知らぬ海の<sup>海</sup>方には憧憬を有たないや

のな<sup>い</sup>筈である。或者は其茫洋たる振に眞境

の海の測り知らぬ事を嘆き、ある者は澄澄

と波の響に永遠の聲を覚ゆる。東の國境と、